下関市立垢田小学校

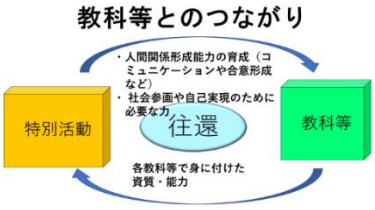
自分をみつめ、自らの手で未来（あす）を切り拓く子供の育成
～つながりを意識した特別活動～

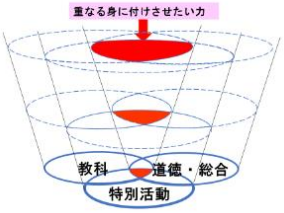
1　研究の概要

①　教科等とのつながり

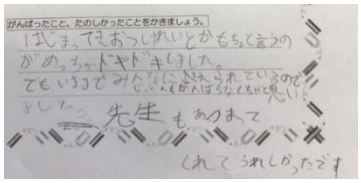
各教科等で身に付けた資質・能力を、特別活動において、集団及び自己の問題解決のために活用することが、社会生活に生きて働く汎用的な力として育成することにつながり、さらに特別活動の充実により各教科等の「主体的・対話的で深い学び」が支えられるという往還の関係にあると考える。このことからも、特別活動と教科等の指導をつなげることで、効果的に児童の資質・能力が育成できると考えた。

簡単ではあるが４つの学年の取組の概略を図で示す。





＜２年　学活（１）＞



道徳「どんなクラスにしたいかな?」

図画工作科「まどのあるたてもの」「力を合わせて」「へんしんしよう」

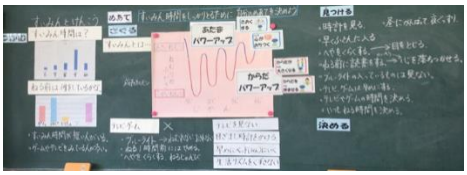
国語科・情報「メモをとるとき」

身に付けさせたい力
「みんなで発表会を計画・実践する力」

生活科「ちえとわざのたからばこ」

学活（1）「段ボールハウス発表会をしよう」

＜３年　学活（２）＞



体育科「１日の生活のしかた」

リフレッシュウィーク

身に付けさせたい力
「生活リズムを整える力」

学活（2）「すいみん時間をしっかりとろう」

＜５年　行事＞

学活（2）「一日のスケジュールを考えよう」

学活（2）「スマートフォンのしすぎと体への影響」

身に付けさせたい力
「メディアと上手く付き合い、良い生活習慣を身に付けようとする力」

道徳「約束」

総合的な学習の時間「わたしたちの生活を見直そう」

行事「学校保健安全委員会」

＜６年　学活（２）＞

家庭科「まかせてね 今日の食事」

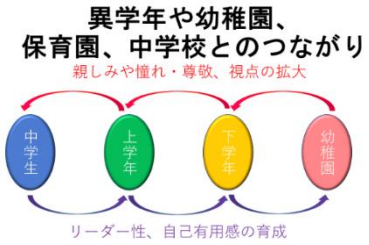
身に付けさせたい力
「朝食の大切さをとらえ、栄養のバランスのよい朝食を手早くつくることができる力」

学活（2）「朝食の大切さを考えよう」

感想
昨日から漬け込んでいてとても味が染みてて美味しかった。
砂糖を沢山入れてあまくて美味しいフレンチトーストにしました。
家族みんなの朝ごはんもつくってみんなが美味しいと言ってくれたのでつくってよかったなと思いました。

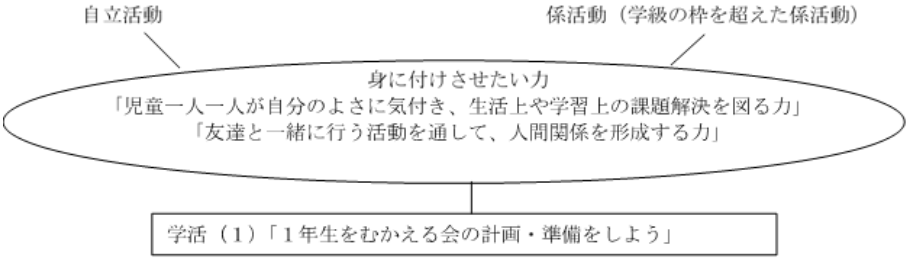
②　異学年や幼稚園、保育園、中学校とのつながり

他者と対話したり交流したりする中で、自分以外の意見を聞き、自分の考えを広げたり、課題について多面的に考えたりすることができる。その範囲を学級だけにとどめず、異学年や幼稚園、保育園、中学校に広げることで、より多様な他者との交流ができる。その中で、自分のよさや頑張りに気付き自己肯定感や自己有用感を高めたり、キャリア形成に関わる意思決定や意欲付けにつなげたりできると考えた。



＜特別支援学級の取組＞

昨年度までは、学級会で決まったことを、教師が企画、運営をして実践していたが、今年度から５学級（３障害種）で協力して、係活動（「企画係」「飾り係」「遊び係」「足あと係」）を行い、実践した。交流学級では、なかなか力を発揮できない児童も、自分がやりたい役割についてその役割を果たし、達成感を味わうことができた。「１年生をむかえる会」では、それぞれの児童が自分の係の仕事に責任をもって取り組み、１年生が楽しんでいる姿を見て、上級生は企画したり実行したりすることのよさを感じていた。



＜小中のつながりをつくる児童会と生徒会でのあいさつ運動＞

令和５年度から、垢田中学校区内での児童会と生徒会が連携して「小中あいさつ運動」を行っている。中学校では、生徒会を中心にして、小学校では、総務委員会が担当として活動している。中学校のスローガンである「２０（にじ）の日（地域との懸け橋に）」は、４年度に本校で作成した児童会スローガン「友達同士　認め合い　地域大事に垢田っ子」と共通する点もあり、これを具現化するよい取組となっている。また、生徒会の活動内容を聞く機会もあり、児童会での取組を中学校と連携した取組にしていくヒントをもらう機会となっている。

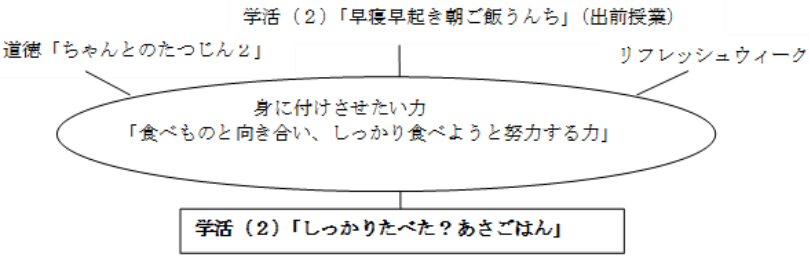
２学期には、中学校の生徒総会での話合いから実現した合同クリーン作戦を実践し、中学生と地域の方と一緒に地域清掃を行った。

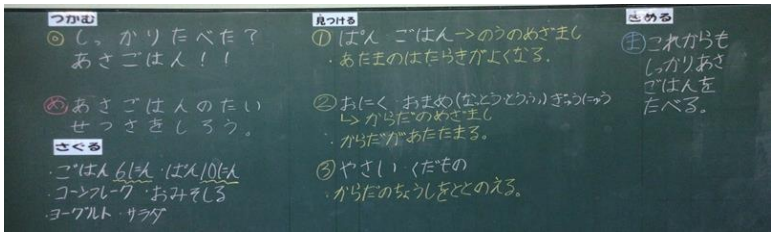
③　地域や家庭とのつながり

子供たちが社会において自立して活躍するためには、学校と地域、家庭が連携することが必要である。学級活動（１）やクラブ活動、児童会活動等自発的、自治的な活動においては、地域の方の協力を得る活動が、学級活動（２）や（３）においては、社会参画の意識の醸成や地域や社会での自己実現を目指す活動が考えられる。また、特別活動の目標を地域と共有した教育活動を展開することも地域や家庭との連携を図るうえで重要であると考えた。

＜１年　学活（２）＞

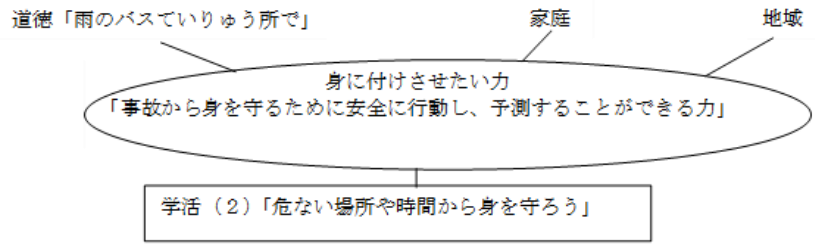
学活の授業を通して、朝食を摂ることの大切さを理解し、しっかりと朝ご飯を食べようとする意識が強くなった。授業後の給食の時間には「しっかり食べないといけないんだよ」など授業の内容を意識した発言も聞かれた。一方、児童だけでは、栄養バランスまで考えた朝食を摂ろうとする意識は低く、保護者の理解を得て、家庭と協力していくことが必要不可欠であると感じた。家庭と学校をつなぐ「学びのあしあとファイル」に本時のワークシートを入れ、取り組んだ内容等で保護者と連携することができた。





＜４年　学活（２）＞

映像を見ながら危険を予測する活動と自分自身の日頃の行動を振り返ることを通して授業後に地域の危険箇所についての会話が見られるなど、日々の登下校時に気を付けようという意識が強くなった。学級便りで家庭に知らせたり、補導員との月例会で地域の方に話したりして、連携を行うことが出来た。また、登下校の際に見守りをしてくださっている地域の方への感謝の気持ちも芽生えてきた。その後、２学期の終わりに５人の地域の方へ感謝の気持ちを表す会を催すことにつながった。



２　成果と課題

今年度は、特別活動の研究も３年目を迎え、これまでの取組を通して成果と課題を整理し

た上で、取組の概要に挙げた３つについて研究を進めた。その取組の成果の一つとして全国学力・学習状況調査の児童質問紙の肯定的回答の割合が増加したことをあげたい。前年度との比較であり、母集団が異なるため参考値でしかないが、(5)「先生はよいところを認めてくれている（前年度比＋32P：ポイント）」（13）「自分と違う意見について考えるのは楽しい（同比+22P）」(26)「地域や社会をよくするために何かしてみたい（同比+33P）」など、特別活動の充実を目指して取り組んでいる本校にとっては、他者理解や他者受容、合意形成、集団への貢献といった視点で児童によい変化が現れていると捉えており、取組の継続に自信と元気をもらった。

また、「子供たちが主体的に活動したくなる内容の吟味や自分たちの手でつくりあげ、実現させる喜びを味わわせること」、「みんなで知恵と力を合わせるとよりよい考えが出せること」、「自分にもできることがあると実感させること」などについて、児童が実感する機会は増加したと感じており、話合いや企画した行事などの後にそのような感想をもつ児童がほとんどである。それ以外にも授業としての扱いではない休み時間などに起こった出来事や問題点、前向きなアイディアについても、児童が自らの意見交換で解決しようとする場面を多く目にすることができた。

一方で課題としては、子供の実態が日々変化する中で、身の回りにある課題を解決する力を身に付けさせることができたかというと、十分であるとは言えず、今後も継続した取組の中で子供たちと一緒につくりあげる余地があると感じている。また、自分で解決しようとする力や集団で協力して解決しようとする力を、発達の段階に応じて系統的に育てていく必要があると感じている。それは、それぞれの学年において万遍なく学級活動（１）～（３）を行うのではなく、小学校卒業時の姿を見据え、系統的に重点化することが必要なのではないかということも見えてきた。

今後は、各活動・学校行事において身に付けるべき資質・能力の明確化と重複しているものの精選、またどのような学習過程を経験させていくかという点を系統立てていくことについて研究を継続したい。地域と連携した取組みを考慮に入れると、その取組がどの資質・能力と関係があるかや学習過程の系統性についても地域や保護者の方にもわかりやすい説明が必要となる。それは、我々教員がいかにそれらについて端的な言葉でとらえることができているかに尽きるのである。

特別活動で生徒に身に付けさせたい資質・能力は、保護者や地域の方にとっても理解しやすいものであると考える。目に見える学力を身に付けることはもちろんであるが、目に見えない学力として児童に身に付け、進んで仲間と関わりながら、よりよい集団、そして未来（あす）を切り拓こうとする子供を育むことに、これからも継続的に取り組んでいきたい。

最後に今回の研究について、助成の機会をいただいたことに感謝している。